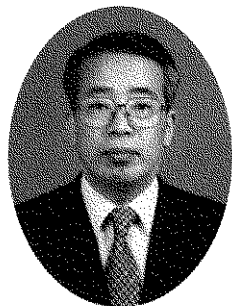


ノーベル化学賞ヒーガー教授と 面会して



北陸先端科学技術大学院大学
新素材センター教授

牧島 亮男

昨年、白川教授と共にノーベル化学賞を受賞したアラン ヒーガー (Alan J. Heeger) 教授とこの4月に面会する機会があった。教授はカリフォルニア大学サンタバーバラ校 (UCSB) で伝導性ポリマーの研究をしており、白川教授の発見した伝導性ポリマーの重要性に注目して、当時所属していたペンシルバニア大学に白川博士を招聘にて、共同研究をして、従来、絶縁体であったポリマーの伝道機構の説明する仕事をされた。御夫妻で北陸先端科学技術大学院大学を訪問され本校の名誉博士号の授与と記念講演をするために受賞後の初めての来日である。筆者の所属する本校の新素材センターには最新鋭の設備があり、今後国際共同研究を推進するという使命をおびている関係で、ご夫妻を案内し、1時間ほどであったが、種々話をした。筆者はカリフォルニア大学ロスアンゼルス校 (UCLA) に在籍していた関係で、姉妹校のサンタバーバラ校にも訪問したことがあり、又、白川教授とは、共につくば市在住の関係でお会いしており、共通の話題もあった。

教授は63歳で、ノーベル化学賞という学問での最高の栄誉に値する基礎的研究をされ、しかも、材料科学の分野である。お会いする前はヒーガー教授にたいして日本流のいわゆる学者のイメージを持っていたのであるが、話をしたり講演を聴いたりして、印象は変わってしまった。けっして悪い印象ではなく、実直で、快活な好人物である。

教授は10年前に伝導性ポリマーを応用した表示パネルの開発会社を設立、運営しており、現在の関心は、米国大手化学会社と共同で、製品化することにあるようである。講演では、企業化への問題点を含めて、実用化の興味を熱心に話していた。この点、白川教授への印象とまったく異なるものであった。

対照的に、日本での、大学教官は実用化までは踏み込まないし、ましてや自分でベンチャー企業を設立して、富を得ようとなどはなかなかしないし、公務員であるかぎり不可能でもある。日本では多くの規制もあるし、独自の精神的風土もある。なお、UCSBは州立の大学であり、ヒーガー教授はいわば公務員である。

筆者が旧無機材質研究所に在籍していたとき、いくつかの特許は事業団をとうして企業に実施されたが、大きな壁があった。今は改良されているかもしれないが、実施企業に行くのも大変で、職務専念義務を大幅解釈してやっといくことができた。やはり多くの規制があった。

これらの例は、個人レベルの話であるが、現在の日米間の経済活力の根元的差を如実に示している。

ニューガラスフォーラムは、産官学の連携がうまくいっていると思う。いかにも日本的と言えるかもしれないが、いわば、集団でお互いの壁を低くして、規制を緩和して、相互交流による研究の活性化、経済活動の増進に大いに寄与してきている。今後も会員各位の奮起とその発展を期待するものである。